
私の名はA R - 1 3 2

春野桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の名はAR - 132

【Nコード】

N1790A

【作者名】

春野桜

【あらすじ】

私の名はAR - 132、通称アレックス。お嬢様を見守り続けて8年たちますが、最近お嬢様が幼馴染みの遠矢と一緒にいるのが、少々気になるのでございます——。この感情は、何と云うのか私はまだ知りません。

ここは慎重にやらなければならない。

私は細心の注意を払い、コポポ……とこ気味の良い音をたてて紅茶をティーカップに注いだ。白バラと白百合の描かれた可愛らしいティーカップは、お嬢様のお気に入りだ。

——よし、上手く注げた。

慎重にティーカップを持つと、ソファで読書をしているお嬢様のもとへそれを運んだ。アッサムティーの良い香りが、私の嗅覚センサーを反応させた。ふむ、悪くない香りだ。

「お嬢様、紅茶をお持ちしました」

「あら、ありがとう。アレックス」

可愛らしいお嬢様のお礼が聞けるだけで、私の感情機能は「嬉」を示す。

私の正式名称はAR - 132。お嬢様からいただいた名前は『アレックス』である。

おわかりのように私はロボットだ。

今年14才になるお嬢様の世話をしてはや8年が経過した。

いやはや、お嬢様も立派なレディになられた。

今日はお嬢様は学校がお休みの日である。

特別用事もないはずだし、今日は家でのんびりされるはずだ。

「あら、アレックス。何か嬉しそうね」

「は、左様ですか？ いや、お気のせいでしょう」

ふむ、いつの間にか口角が上がっていたようだ。

お嬢様の前でだらしない表情になるとは……ううむ、不覚。

——と、その時。

パターン！とやかましい音とともに誰かが部屋に入ってきた。

む……！こんな風にドアを荒々しく開ける輩など、あいつしかおらぬ。

「やあ！妃芽！」

「静にしないか遠矢！お嬢様のご迷惑だ！」

失礼にもお嬢様の部屋に飛込んできたのはお嬢様の幼馴染みの遠矢である。

お嬢様と同じ年であるにも関わらず、この落ち着きのなさはいつまでたっても変わらない。

「よう、アレックス！相変わらずしかめっ面だな」

「そんなことはありません」

そう答えたものの、私は密かにドキツとした。

そうなのだ、最近遠矢を見ると何故か穏やかではなくなる。

いや、遠矢を見るとではなく、正しくはお嬢様と遠矢を見ると——
なのだが。

「遠矢今日はどうしたの」

「おう！今日は散歩に誘いに来たぜ！中央公園に妃芽の好きそうな花がたくくさん咲いてたぜ！」

「ほんと？行きたい！」

お嬢様の顔がパツと輝く。

そんな表情を見るだけでいつもなら私は喜びで満たされたのに、何故だろう——素直に喜べない。

さつきまでは正常に感情機能は動作していたはずなのだが……ううむ、精密検査が必要になってきたのか。

定期検査では何もなかったはずなのだがなあ。

「ねえねえアレックス、アレックスも行きましょう！パンジーが綺麗なんですって」

顎に手をそえ唸っていた私に、お嬢様がお誘いの声をかけてくださった。

するとたちまち感情機能が「嬉」に働いた。

うむ、大丈夫だ。故障はしていないな。

「は、わかりました。ではお嬢様、今日は日差しも強いので、帽子を取ってきましょう」

「そうね。あ、いいわよアレックス。自分で取りに行くわ」

私を止めお嬢様は自ら隣の部屋へ帽子を取りに行かれた。

いやはや、成長されましたお嬢様。

——しかし困ったことに、そうすると遠矢と二人きりになることが安易に計算された。

うーむ、何故か気まずいぞ。

というよりも、「気まずい」という感情が私の機能にあったのか。

「おい、アレックス」

遠矢が私に話しかけてきた。

私はちろりと遠矢を見た。

「何だね、遠矢」

「何だね……じゃねーよ。最近俺に冷たくねえ？」

「いえいえそんなことはございません」

冷たくなどはしていない。

ロボットは人間に対して親切であるよう、プログラムされているからだ。

「そっかなあ」

「そうです。遠矢の気のせいでしょう」

ああ、お嬢様早く戻ってきてください。

なぜだかわからないが、私は遠矢の横にすることが少々苦痛に感じます。

お嬢様と同じように小さい頃から見てきた遠矢ですが、ここ最近子どもから少年らしくなり、同じように少女らしくなったお嬢様の横に居るのを見ると、今までに感じなかった感情に襲われるのです。

その感情に、私は少々戸惑いを覚えるのです。

ロボットにしては複雑な心境になっている私に、遠矢がまた話しかけてきた。

ロボットにはできない、何とも照れ臭そうな表情で……。

「まあ、あんま嫌わなくてくれよ。こんな俺が妃芽の恋人って認めたくないんだろうけどさ」

——その時。

内部にある人工心臓が激しく鳴った。

ドクン……（何だって？）

ドクン……（『恋人』……？）

ドクン……（お嬢様と遠矢が……！？）

これは、何という名のプログラムなのだろう。

ロボットは事実に対して冷静に分析するよう作られているはずだ。

——当たり前なことじゃないか。

お嬢様と遠矢もお年頃になられたのだ。

人間にとって身近な異性がそういった対象になるのは珍しくもなく、よくよく考えれば自然なことなのだ。

……なのに、なぜこんなにもショックを受ける？

なぜ、そんなことに気付かない？

人間よりも遥かに高い知能を持つ私が、なぜ……。

「お待たせ、遠矢、アレックス！行きましょう！」

軽やかな足取りで戻ってきたお嬢様。

途端に私の人工心臓がますます鳴り響いた。

——その時、私は全てを理解したのだ。

ああ！なんてことだ……そんな馬鹿な！

そんなこと、許されるはずがないじゃないか！

私はただの鉄でできた人工ロボットで、お嬢様は人間なのに！

こんなことが！

「……お嬢様、私は部屋でお待ちしております。旦那様に命令されていた用事がありますので」

この時初めて、私はお嬢様に嘘をついた。

ロボットは人間に対して嘘をつけないようプログラムされているはずなのに、そのプログラムさえ上回る感情を私は知ってしまった。

——なぜ、そんな感情プログラムがあるのか、私にはわからないが。

「そうなの？残念ね……じゃあ、遠矢と行ってくるわね」

そう言つて、お嬢様は遠矢と手を繋ぎ部屋から出ていかれた。

もう、お嬢様は私だけのお嬢様ではないのだ。

——しかし、私はそれを受け止めていかなければならない。けれどなぜ。

こんなプログラムが私に課せられたのか。

その目的はなんなのか。

わからないことだらけだが、私はこれからつき合っていかなければならないこの感情のことを考えると、今までにない複雑な感情反応を示す他なかった。

——いやはや、人間とはこんな厄介な感情を持っているのか。

この感情があるからこそ、あんなにも嬉しくなることができ、また悲しくもなれるのか。

そんな感情をロボットの身で体感できた喜びは、正直複雑な感情に負けている。

「……さて、お嬢様が帰ってくるまでにおやつの準備をしますか」
私の名はA R - 1 3 2、通称アレックス。

お嬢様を見守り続けて8年。

お嬢様の為に尽し、お嬢様だけを見ていた。

そして。

お嬢様に恋をした。

私はそんな、ロボットでございます。

END

（後書き）

いかがでしたか？「ロボットの恋」は一度書いてみたかったので楽しく書けました（＾－＾）アレックスの「いやはや」が気に入ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1790a/>

私の名はA R - 1 3 2

2010年10月20日18時49分発行